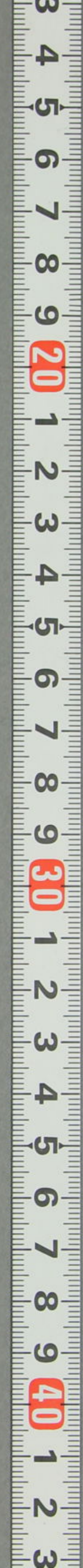


世新文選
四

5
4458
4



門 八 5
葉 4458
卷 4

皇朝文選第六

序跋類

其代序 志心万句序 一居序 觀青逸塵序

三不合序 千句跋 瑞鶴佳書跋

對句類

花鳥對 雲法師對

六朝文選

昭和九年
九月二十八日
購求

1850年

1850年

Handwritten text in cursive script, likely a diary or journal entry, covering the right page of the spread.

Handwritten text in cursive script, likely a diary or journal entry, covering the left page of the spread.

Handwritten text in cursive script, likely a diary or journal entry, covering the left page of the spread.

大月之盛

三

帝鴉住お路

運二二片

一巻の箇如老人の老とるくはちるまはれま一其の
 序より帝鴉のこころとくひし路より序の巻とる
 つつと命よりはめむのせのるある一其の巻
 の中より一その巻は巻とる一梅柳より一
 一くくをむのくくもあつた牡丹は巻の巻はく
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は

秋を初秋の心はちやうに二日月の巻は巻は
 まつり魂はたり二巻のありたるま
 一ねの巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は
 一其の巻は巻にきく一其の巻は巻の巻は

大田文鑑六

ありて云く、髪を人々さし、かゝるは、けり、ひさのまゝ、さ
 ず、山々ありて、海へ、年々、く、の、光る、ま、つ、り、
 犯云北路ノ専用ハ四季ノ各月ヲ配ルニ妙アリ誠ニ、ま、ま、ノ
 文法ハ北選ニモ教多チカラ何レモ一體ノ差別アリテ其、等、ヲ
 文鑑ノ文鑑ト見ルヘシ去ハヤ四序ニ年ニ心ノ二子ヲ四百ニテ
 春ハ今年ノ老ト云イ夏ハ昔ニ老ト云イテ秋ハ老ヲ
 心ニスト云ル衰老ノ韻ハ北所ニシテ前ノ書、類ニモ、ま、ま、ラ
 冬ハ燒火ノ更ナルニ水、火、ノ、妙、絶、老、煤、掃、ノ、對、ノ、親、切、心、也、ヤ
 夫、待、ノ、二、子、ヲ、以、テ、年、々、ノ、老、ト、云、イ、ト、セ、ル、七、縱、八、横、ノ、自、在
 ヲ、待、ス、シ、但、シ、此、老、ハ、農、ノ、一、輪、ハ、佳、ス、先、師、ト、所、縁、ノ、果、ノ、
 あり

對向類

花鳥對

東花坊

澤部ねにせよ天地あり陰陽あり男らり女らり老長ハ
 美のありよにうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 なうよにうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 おさよのいひあひまうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 ねてまうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 ともあふよにうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 さしよにうらやまの父子の恩のありよにうらやまの夫婦の情の
 花鳥と林よさるれば春とすし、仲のむに聞らるの甘々と

五つん秋のむらさきつらき
 月をくばらあわしあゆみの
 早雲の梅と詠して雪の
 連詠入荒鳥のうまとい
 とらこころの破の梅は月
 情と云うて秋の事の
 要を坊對ふらね陰陽の
 してとそれらるるもの

思ふらんのむらさきつら
 くれよあちのむらさきの
 君上の雛鳩の詩詠の
 ねらねの雛鳩の八重の
 入あそびらあそびか
 らももいんかして昆
 一樹の梅の音の
 ののののののののの
 ののののののののの
 ののののののののの
 ののののののののの

あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら
あつたのころは木のむらあつてまるとはなつたやまのむら

と新古の次ありて橋よ繫馬と又兵衛、浮世舞より
の歌物師を行く流とさひよれ、まゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

心はこころのふとちかむのこころしてまかりかれのたふ
 ちよて柳のたれの止まらぬふらけの嵐の歸せぬ
 もそをむむ娘のふよふれし思ひはらけのまよと
 くや上路アゲルの山姥のくくくわたり和音の浦人ふ
 やりてしはまにむとふのふとんやんふのむかひ
 ね云此類ハ宋王カ對向ヨリ條ハ理平廣些素ナリ
 鳥歎松竹ノ對ニ效ヒテ先ハ花鳥ノ三子ヲ題セル本朝
 風雅ノ的面ニシテ先向イ先對ノキ物ナラマ但シ對向
 文法ハ理論ヲ後ニシテ文章ヲ先ニセル委曲ハ青卷ノ題註ニ
 在リテモ設論ノ虛實ヲ知ルヘシ

夫ハ向者ハ天地陰陽ヨリ君臣父子ノ五倫ラムイ其ヨリ詩ヲ
 連綿ニ花鳥ノ少女情ヲ論シタルカ或ハ花モ或ハ鳥ノ例ニ物語
 ノ詞ヲ借ワテ花ハ今宵ハ古きノ意ヲ取リ或ハ秋花鳥
 ニ冬ノ花鳥ト云キテ啼ト嘆トニ數語各レテ互見法ノ自在
 凡ルシ或ハ菊ニ一啼トハ佳音ノ意ノ詞カラ世ノ耳ナレヌ
 花鳥ト云イナレ殊ニ秋冬ヲ錯綜シテ多ニ句讀ノ用ヲモ
 知ルシ或ハ詩人ニ早嘆トハ江南一枝ノ梅ヲ借テ一鳥不鳴雪
 儘山ト云ル古詩ノ詞ヲ取合ヒタハ花ト鳥トヲ拾ヒ寄セラ
 是ラ一時ノ働ト云ヘ但シ我輩ノ花鳥トハ折鶴ヲ冬ニ寄ナセル
 舊ニ新式ノ條ナリ或ハ冬ノ三疊見トハ兼四ノ歌ニ寄

セテ千鳥ニ花ノナキ直ラ云リ或ハ硯海筆林トハ對者ノ體ノ
 傳達ニ喩ヘテ向者ノ心ノヲ知ラ論セヨトナリ
 去レハ對者ハ君父ノニ子ヨリ昆才明友ノ互偏ニテニ強テ染ノ
 花鳥ヲ論セス先ハ情ノ花鳥ヲ表ス本ヨリ詩ヲ連述ニハ
 染情ノ先後ヲ知レトナリ或ハ雖鳩鴉頭ハ和漢ニ詩アリ證
 文ナルニハ雲漢折ラ詩也周南ニ對シテ鳩鴉ノ故又ハ別々
 去レトハ雲ノ依寄ハ夫婦同居ノ深本トハ鳩鴉ノ古ニ取合
 セタル文三章ノ自在ヲ秘ス一ク文章ノ傳達ニ證一レ或ハ
 詩花ニ寄鳥トハ漢文ニハ詩ニ取花濡地ト云イ後章ニハ
 初陽毎朝東ト啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩寄ラ云ス

詩徑トハ雲トノ結文ナルラ見ルヘシ或ハ兄弟才ノ花鳥ハ唐詩
 伽諾ノ美格ヲ用イ或ハ明友ノ花鳥ハ會人地ニ方三ノ語
 脈ヲ成スむモ一樹ノ働ヨリ例ニ虛毎クノ兩用ヲ知ルヘシ
 或ハ梅ニ管カトハ射ラハ對者ノ詞ナレハ此子ヲ寫リテハ讀
 一カラヌ或ハ口方野モ相攻モ總テ古詩ノ詞ナラハ口方野ハ
 花ノニ子ヲ云イ逢坂ハ鳥ノ子ヲ云ル是ラ隱見ノ法ト云
 次ニ春三ノニ子ハ忠峯ト寄ヨリ杜詩ノ春寒氷雪ヲ
 含メテ管花ノニ子ノ時節ヲ云ル例ニ和漢ノ傳同ナリ或ハ
 春毛之取實ト八重令食ノ詩ノ四句體ヨリ和漢ノ節令遠
 ラ云イテ云云八重ハ知花ノ云イカケナカラコ思テハ四重帝ノ死心

云々云々或ハ獅子ニ牡丹ノ續キハ牡丹モ春夏ノ季同
 云々和漢ノ論ノ序ヲ備ウテ天竺ノ花鳥ヲモ云イセリ
 但シ詩ト云イ蹟ト云イテ一年一月ノ意ヲ對セル牡丹ノ
 上ノ各語ニシテ況ヤ花會ノ筆法ヲヤ然ルヲ蓮ニ由ル
 云々伽陵ノ花ノ蓮ニウケテ狀衣翠臨龍ノ詩ヲ云イ
 總テハ花鳥ノ縁語ヲ總テハ其名ヲ云イテニ配セル總テハ
 諸路ノ新結スル一子ニ言フ粉骨ヲ粉スレシ或ハ釋ニ般子馬
 ト席ニ紅蓮ノ一對ハ先ハ倒將衣ノ格ナカラ全クノ意對
 ノ奇絶ニシテ暑濕モ舟ニ日本ヲ答メテ侍又ニ此等ノ
 法格アリト信スレ然レハ浮世又兵衛ハ天津編ノ元祖ニ

得野古法眼ハ教也繪ノ先達ト云イナセリ或ハ唐様ニ云ハ
 反トニ和漢ノ剛柔ヲ對シテ中間ニ心ノ花鳥ヲ結語セル等
 ニ文章ノ時ヲ知レシ或ハ物ニ好惡トハ強テ一筆ノ論ヲ設テ
 内ニ連聲ノ弟も弱ラムイ外ニハ能語ノ活計ヲ云ハ柳ニ鶴モ
 豆ニ鳩モ例ニ能語ノ筆格ナラハ一筆ノ撰様ノ短語ヲ云ハ
 或ハ粟ニ麩トハ食ラ水几類イヨリ花ニ鳥ノ用アリテ
 ニ雀ノ魚ヲナラシハト多ニ世法ノカラ極タル誠ニ文章ノ
 ナカラニ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ竹繪ト云イナセル何レモ詩
 ノ詞ヲ備テ冬ノ花鳥ノ風情ヲ附タル此等ハ画心所屬ト
 或ハ菊ニ餅花トハ暮行宿ニ春ヲ待ツト云ハル結前生後ノ

きりけりやと我んと書きて一論に勝ちたりとて
よこつゝやれの不詰と云ふにも居る言切りせき
あしせきややれやのやれ士の境裏に世間のけり
まきゆいすゝ々の言ありけり
えりや一の程よの可い分別

ねむ北望柳八白櫻下ニ誠ニ毫ノ模様ニシテ拾ニ年尾ノ句ヲ
終リニ元日ノ句アルヨリ作者ハ是ヲ回文格ト題セル誠ニ
一格ナルラ今ハ選ニテ對向類ニ加フモハ白櫻ノ對論
面在躬ノ言詔ヲ争ヒテ巴ノ厄右ニ次断セル鏡ノ影ノ異別ハ
分明ナリ去ルハ漢文ノ設論ニモ勝レテ一篇ニ十七八首ノ彼我

ニ字ヲ墨ムをモ曲折徑遠ノ所ナルニ况ヤ泡影ノ論ヲ離シテ
結文ハ我ト我ト書スル急ニ笑中ノカヲ用イテ文ニ虚實
ノ自在アリト称スレ但シ作者ハ濃西ノ大垣ニ産シテ谷氏ノ
隱士ナリ白櫻下ノ三才ハ下ノ称号ナリト

本朝文選

十一

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



本朝文選才七

辯類

居眠辨 桃化辨 伯鬼辨 自得辨 梅長者辨
巴了 與枝辨 招鬼辨

説類

説上人説 名十指主説 櫻島人説 名説
名二子説 論師説 夜話説 辻説 尾説

頌類

高寺地頌 不懲名頌 積徳頌
招耳頌

本朝文選

ふらりきりらや仙のよの通移し一に兒のよれ辨
あつにけはとのちしととらこひてくつらめとふ
もや海に舟のと達し智鏡の向ふるありて日々に
和ふと忘れらんいささかのちよやく一ふいせ

犯世難捷躑ニレテ人ヲ誨ユルニ文アリト云レシ去ニ唐屯自縁
ハ遺教経ノ趣向ニ其人ヲ四人ニ前ニ九最後ニ三ニ好辯
ナラン況ヤ兎ナラ辨明レテ彼カ上下ニ云イ寄ル例ニ佛諾
筆格ヨリ虚實ハ二篇ノ趣意ナリ但レ天下村ハ福屋西ニ

自得辨

北七聖

はくく世夢のちまともふく河豚の毒あれたる
あふなくは月と骨あふの買人かたはら
河豚の毒あつく龍宮の割れよめとれては田女
こころさやくはらとて海目の骨あつて西の寺様
かよてよふさし一物三つるのむか減りて得失當分
こころのちりやにけつたを賢存あれたる牙あつく丸懸あれた
白雲いりし月のあつたれやとていどのよのぬとらむ
せらさしし向ふあつたよと孤子のおもひ持うし
本流の布子もさうしてさる美西よあれて美西とさる
それこそ持てくくはあつたあつた一はなれはあつた

読んくしてはきりの思ふもんもさうもしくも子文の程
 居てもさうなれてさく乾坤のふよむさうに重陽の朝は
 日とくにさうさう大君の格も月をさうさうさう所も
 あつゆのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 武陵のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さ田ぬありて入るさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 ね云此辨ハヤ全カ題ヲ借テ其詞ハ虚誕ナルニ似タレト儒仙ノ
 言語文字ヨリ人更ノ令別理處ヲ離レテ自己ヲ求ルニ會々情

ナリ誠ニ性ノ昭々也物ノ善惡ニカタヨラヌニ臣ノナス所ニ隨ハ
 孟子モ説残ル所ニ俳諧ノ多ク筆力ナリ殊ニ世臣ノ君臣
 ハ孟子カ齊物ノ詞ヨリ出テ箴中ノ君臣ナラシムルハ魏川有陽
 卜八起句ニ賢君ノ隱レ所ヲ云イ重陽大君ハ結語ニ題ノ招
 ノ子ヲ云ハルニ遠ク文章ノ互昭ヲ知リテ博達自在ノ文はト
 但し在在中國ハ仇角ヤ別墅ナリ

説類
魏上人説

東山長味

魏の跡わりのありさうさうさうさうさうさうさうさう
 ひささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

二云ハスキ 釣諾ナルヲ輕辱ノ佞臣トモノ案ホニ倍タルハ
 口惜シ去シト雷昌利カ各語ニテ一塵ノ心ヲ轉換セシ禪家
 二同答ノ活法ト云シ誠ニ史記ノ滑稽傳ニ東方朔拔鼻
 ナト武帝ニ答ハク九條語ニシテ多ニ他諾ノ道ヲ論ハ國君
 ヲ恐ルハ世田ノ理屈ニシテ國君ヲ心安シハ他諾ノ道理
 總テハ他諾ニナラヌ文鑑一部ノ道理トテモ此等ノ凡雅ヲ
 兼テシ
 江談美説
 露五節其衛
 けらく河滿陀孫と考あうゝ如素ハ五却の同思惟

され上二人より下ニ世々好ムヤク好ムヤクナリ
 うんとの折言氣ハよくや神あやてあんやう
 ことさうやあやもや ^{カヒ} 妙ハ法陀や素ハ二條さうあう
 けりともあてはくよ兵のあうもあく十二カ里あまの
 西方もりこやこの方ハ伸あがりて諸人の地獄とけくると
 えていそあくとつりあんナリせれよりい持國多行
 外ハどう一騎當千のや天王ノ作けられ比獄とけ
 かもらふいし高屋とさういりもれい芝居一かよ
 二節一ノ感さむりのらふりま
 和云世有ハ夷洛ニ名ヲ知テ洛陽ノ仏夏奈礼ニ彼君ニ居

もも角とさしあつてさういふさうの節がさういふ節に
 女へさういふて持すの肥からさういふ節の位とさういふ
 印城のほろりさういふ節のまともさういふ節のさういふ
 のまともさういふ節の産の位のさういふ節のさういふ
 ともいふて人を許すともいふ節とさういふ節の豊と
 色ともいふ節の豊の思ふかともいふ節の豊の豊に
 序のさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 男の用とさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 ともいふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 さういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ

きらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ
 くらきらと過ぎのらさういふ節のさういふ節のさういふ節のさういふ

狂云世の節、劉信の酒徳、頌ニ對テ題ニ醋徳ト假名ヲ附
 先ハ徳字ハ本ヨリ和訓ナクテ徳字ヲ訓ニ用レテナリ世美
 俵文ノ節ニシテ奇書ノ大徳モ世意ナラン或ハ中京ハ醋
 名所ヨリ梅津ハ梅ノ字ヲ云ル様鯛ノ長白モ紅染ノ

短句モ慮外ノ語トハ隠見ノ法ニシテ總テ此後ノ公筆格ナリヤ
 去レラサトモ見ツツ田カトハ奇書ノ詞ヲ借ナカラ物ヲサト
 見損シタルモモ一編ノ有尾ニシテモモ一編ノ名言ト云ヘレ
 但レ作者ハ越ノ系魚川ニ住ス高野中ノ俳士ナリ

松茸耳頌

川山三三

世ニシテ實のぬらありて妻來らその言を物
 柄標らそのむじとまもさばねし言とほむむむむ
 いた屋よはむその物さふかしくぬらとさふの風雅
 らんらん人のほくらんむむむむむむむむむむむむむむ

おらまふよあむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 しまそ秋うらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 るとむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 のまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 らあむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 むれそめむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 そめをら雪の白々ね久来仙人の脛とさふむむむむむむむ
 人のめこつれてむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

